
2022 年度日本語教育センター活動報告

1. 2022 年度日本語教育センター運営体制

運営委員会

センター長：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：石川 巧	(文学部教授)
運営委員：井川 充雄	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)
運営委員：杜 国慶	(国際センターから、経済学部教授)
運営委員：(春学期) 韓 志昊	(観光学部教授)
(秋学期) 舛谷 鋭	(観光学部教授)

実務委員会

センター長：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：石川 巧	(文学部教授)
センター員：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員：金庭 久美子	(特任准教授)
センター員：藤田 恵	(特任准教授)
センター員：数野 恵理	(特任准教授)
センター員：小林 友美	(教育講師)
センター員：任 ジェヒ	(教育講師)
センター員：小松 満帆	(教育講師)
センター員：鹿目 葉子	(教育講師)
事務局：吉田 友子	
事務局：鈴木 洋介	
事務局：澤野 礼奈	
事務局：宮本 杏子	

兼任講師

泉 大輔	武田 聡子
井上 玲子	谷 啓子

小澤 雅	栃木 亜寿香
川端 芳子	富倉 教子
黄 慧	長島 明子
小森 由里	長谷川 孝子
齊藤 紀子	東平 福美
佐々木 藍子	平山 紫帆
佐々木 瑛代	保坂 明香
沢野 美由紀	三浦 綾乃
嶋原 耕一	森井 あずさ
末松 史	山内 薫
高嶋 幸太	

2. 活動報告

日本語教育センターホームページにて3月末公開予定

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/reports/default.aspx>

目次（予定）

1. 各科目についての報告
2. 2022年度 Placement Test 実施報告
3. 2022年度日本語相談室実施報告
4. 2022年度立教大学漢字検定試験実施報告
5. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告
6. 日本語教育センターシンポジウム実施報告
7. 日本語教育センターニュースレター発行報告
8. 短期日本語プログラム報告
9. センター員活動報告
10. 2022年度 FD 記録

日本語教育センターセンター員 教育研究業績一覧

池田伸子

研究論文

1. 「オンラインによる日本語学習支援活動の事前学習に関する研究——連想法による分析を通して——」『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、1-17頁

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌との共同執筆)『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究助成

1. 2021.4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成：発展的評価を实践できる日本語教師への研修」(研究分担者)(課題番号：21K0063)

丸山千歌

著書

1. 『新界標日本語 第1冊 改訂版』(徐敏民と共同主編)、復旦大学出版社

研究論文

1. 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Eの場合——」(小澤伊久美との共同執筆)『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、19-38頁

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、池田伸子との共同執筆)『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究発表

1. 「ポスト・コロナを見据えた日本語・日本文化授業の実践の広がり」、The 4th International Conference on Japanese Studies, Language and Education、インドネシア日本語教育学会、オンライン開催、2022年10月22日(基調講演)
2. 「立教大学異文化コミュニケーション学部におけるモンゴルとの教育交流の意義——日本語教育の取り組みとインターンシップ・プログラムの観点から——」、第6回日本モンゴ

ルシンポジウム（日本・モンゴル外交関係樹立50周年記念国際シンポジウム、モンゴル文化教育大学・桜美林大学シンポジウム10周年）日本とモンゴル——過去・現在・未来——、於桜美林大学。2022年11月22日（招待発表）

その他

1. 「異文化コミュニケーションと多文化共生を推進するために」、目黒シルバー大学、2022年5月11日（招待講演）

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「日本とつながって生きる」選択から見える日本語教育の新時代」（研究代表者）（課題番号：20K00707）
2. 2021.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成：発展的評価を実践できる日本語教師への研修」（研究分担者）（課題番号：21K0063）

数野恵理

研究論文

1. 「日本語母語話者教師による日本語ナラティブ作文の評価観点の違い——クラスター分析の結果から——」（坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同執筆）、『社会言語科学』、第25巻第1号、社会言語科学学会、2022年、214-229頁

報告

1. 「日本語母語話者教師・非母語話者教師がナラティブ作文評価で重視する項目——評価項目の重視度比較と順位決め自由記述の分析——」（トンプソン美恵子・影山陽子・坪根由香里との共同執筆）、『日本語教育』、183号、日本語教育学会、2022年、1-17頁
2. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」（藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジエヒ、小林友美、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究助成

1. 2019.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」（研究分担者）（課題番号：19H01274）

金庭久美子

研究論文

1. 「メール文に見られる条件表現「なら」の使用について——メールの発信・返信別に注目して——」（金蘭美との共同執筆）、『ときわの杜論叢』第9号、横浜国立大学国際教育センター、2022年、1-16頁
2. 「メール文に見られる用件の切り出し方の比較——タスクの種類および使用表現に注目し

て——」(金蘭美、金玄珠との共同執筆)、『日本語教育研究』Vol.59、韓国日本語教育学会、2022年、105-117頁

3. 「ドイツ語母語話者のメール文における配慮表現の使用」、『ヨーロッパ日本語教育報告・発表論文集 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム』、ヨーロッパ日本語教師会、2022年、652-657頁

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究発表

1. 「円滑なコミュニケーションを行うための一手段——メール文に見られる共有情報を示す表現を例として——」(金蘭美との共同発表)、ポスター発表、第25回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(ヨーロッパ日本語教師会)、オンライン及び対面開催、2022年8月26日

研究助成

1. 2019.4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築」(研究分担者)(課題番号:19K00734)

藤田恵

報告

1. 「多様な背景をもつ学習者がともに学ぶための教室づくり——点字を使用する学習者への日本語授業を体験してみよう——」(河住有希子、秋元美晴、中西溪、庄麗との共同発表) 2022年度日本語教育学会秋季大会 交流ひろば出展、オンライン開催、2022年11月26日
2. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

その他

1. IAVI 日本語サポート研究会
<https://www.iavi.jp/news/secretariat/301.html>
 視覚に障害のある日本語学習者(海外、国内)のサポートを目的として発足。社会福祉法人国際視覚障害者援護協会(<https://www.iavi.jp/>)、日本語教育関係者、視覚特別支援学校の教員と共に運営。
2. 「日本語点字音声ガイド」
<https://www.youtube.com/@Braille-JSL> (Braille-JSL)

現在、日本語パイロット版を公開。2022年度に日本語本公開予定。以降、中国語版をはじめとした多言語展開予定。

研究助成

1. 2021.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「グローバル化時代における視覚特別支援教育と日本語教育の有機的連携に向けた基盤構築」（研究分担者）（課題番号：21K02727）

任ジェヒ

著書

1. 「白書を読む教材の作成」（山本晃彦・任ジェヒ・吉本由美）『日本語コミュニケーションのための読解教材の作成』（野田尚史・桑原陽子（編））、ひつじ書房、2022年11月（第4部第3章分担執筆）

研究論文

1. 「日本語学習者におけるバリエーションの理解——人称表現のスタイル切り替えに対する理解を例に——」『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、39-57頁

報告

1. 「実態調査からみた日常的個別概念としての「丁寧さ」、『待遇コミュニケーション研究』20号、待遇コミュニケーション学会、2023年（印刷中）
2. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」（藤田恵、金庭久美子、小松満帆、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究発表

1. 「待遇コミュニケーションにおける「丁寧さ」を考える」（アドウアヨム・アヘゴ希佳子、李址遠、徳間晴美、蒲谷宏との共同発表）、待遇コミュニケーション学会2022年秋季大会（第37回）15周年記念大会、オンライン開催、2022年10月22日

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（若手研究）「日本語学習者の多様な言語生活に対応したバリエーション教育開発のための基礎研究」（研究代表者）（課題番号：20K13092）

鹿目葉子

著書

1. 「『下町ロケット』で学ぶ！12の社会人基礎力」（大橋真由美、榎原実香との共同執筆）、くろしお出版、2023年2月

研究論文

1. 「タイ中等教育機関における「読解力」育成に向けた新たな日本語授業の提案 — PISA 調査の読解力の観点から —」（大橋真由美、山本由美子との共同執筆）『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、59-77頁

大会発表論文集

1. 「Report on Practice of SECI model in Business Japanese Classes — Through Collaborative Learning among Thai Students —」（大橋真由美、ムニタラウォン・シリワン、山本由美子との共同執筆）『Proceedings of the 16th JSAT Annual Conference 2022』、Japanese Student Association of Thailand、2022年12月、<https://www.jsat.or.th/proceedings/>

研究発表

1. 「ข้อเสนอในการจัดการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นเพื่อพัฒนาทักษะแห่งศตวรรษที่ 21」（ムニタラウォン・シリワン、山本由美子、大橋真由美の共同発表）2022年度タイ日本人学生会 — Japanese Student Association of Thailand、於 zoom、2022年11月16日
2. 「ビジネス日本語教材『下町ロケット』で学ぶ、12の社会人基礎力の紹介」（大橋真由美との共同発表）2022年度タイ国日本語教育研究会 第35回年次セミナー、2022年3月18日（発表予定）

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」（藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、丸山千歌、池田伸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

小林友美

研究論文

1. 「大学生の初対面会話における日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話題選択と話題展開」『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、79-92頁

研究発表

1. 「初対面会話における日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話題管理と参加意識 — 大学生の交流場面の会話を対象に —」韓国語日文学会 2022年冬季学術大会、サイバー韓国外大& ZOOM(ハイブリット式)、2022年12月17日

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」（藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（若手研究）「相互作用を意識した会話教育のため

の教材開発」(研究代表者)(課題番号:20K13089)

小松満帆

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

執筆者一覧（掲載順）

研究論文 Research Papers

池田 伸子 (IKEDA, Nobuko)	異文化コミュニケーション学部教授
丸山 千歌 (MARUYAMA, Chika)	異文化コミュニケーション学部教授
小澤伊久美 (OZAWA, Ikumi)	国際基督教大学日本語教育課程課程上級准教授
任 ジェヒ (YIM, Jaehee)	日本語教育センター教育講師
鹿目 葉子 (KANOME, Yoko)	日本語教育センター教育講師
大橋真由美 (OHASHI, Mayumi)	東京福祉大学留学生教育センター特任講師
山本由美子 (YAMAMOTO, Yumiko)	タマサート大学教養学部日本語講座専任講師
小林 友美 (KOBAYASHI, Tomomi)	日本語教育センター教育講師
泉 大輔 (IZUMI, Daisuke)	日本語教育センター兼任講師
嶋原 耕一 (SHIMAHARA, Koichi)	東京外国語大学世界言語社会教育センター講師

実践報告 Practice Reports

藤田 恵 (FUJITA, Megumi)	日本語教育センター特任准教授
金庭久美子 (KANENIWA, Kumiko)	日本語教育センター特任准教授
小松 満帆 (KOMATSU, Maho)	日本語教育センター教育講師
任 ジェヒ (YIM, Jaehee)	日本語教育センター教育講師
小林 友美 (KOBAYASHI, Tomomi)	日本語教育センター教育講師
数野 恵理 (KAZUNO, Eri)	日本語教育センター特任准教授
鹿目 葉子 (KANOME, Yoko)	日本語教育センター教育講師
丸山 千歌 (MARUYAMA, Chika)	異文化コミュニケーション学部教授
池田 伸子 (IKEDA, Nobuko)	異文化コミュニケーション学部教授

調査報告 Research Reports

黄 慧 (HUANG, Hui)	日本語教育センター兼任講師
------------------	---------------

研究ノート Research Note

野口 聡恵 (NOGUCHI, Fusae)	異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻後期課程
------------------------	-----------------------------------

『日本語・日本語教育』規定

1. 投稿資格

立教大学日本語教育センター員、日本語教育センター科目担当兼任講師、教育研究コーディネーターおよび当センターにおいて適当と認められた者とする。ただし、共著の場合、前述の投稿資格を有する者が1名含まれていなければならない。

2. 内容

日本語教育およびその関連領域。未発表の原稿に限る。

3. 使用言語

日本語または英語とする。

4. 書式

原稿は横書きで、MS Word 形式ないしテキストファイル形式とし、A4判の用紙（40字×35行）で、研究論文は20枚以内、実践報告及び調査報告は16枚以内とする。図表、参考資料、参考文献、注などもこの分量の範囲に含める。文献等の書き方は、『『日本語・日本語教育』執筆要領』に従うこと。

5. 要旨

和文（400字以内）の要旨をつける。キーワードは、和文論文は日本語5語以内、英文論文は英語5語以内を付す。

6. 採否の決定

原稿の採否は本誌編集委員会が決定し、本人に通知する。

7. 編集委員

編集委員会は、日本語教育センター員から選出された4名の委員によって構成する。編集委員の任期は1年とするが、再任は妨げない。

8. 本誌の発行は年1回とする。

9. ウェブサイトにおける公開

掲載論文の執筆者名、要旨、論文本文等を立教大学のウェブサイト等で公開する。
ウェブサイトにおける公開は「立教大学学術リポジトリ運用指針」に基づくものとする。

10. 原稿の送付

次の①～③を MS Word 形式及び PDF データを下記のアドレスに送信すること。

①原稿本体（A4判）1部

②次のものを記した別紙1（A4判）1部

- カテゴリー（研究論文、実践報告、調査報告、のいずれか）
- 和文タイトル及び英文タイトル
- 著者名（和文表記とアルファベット表記）
- 和文要旨（400字以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- キーワード（原稿中の主要語句を5語以内）

③執筆者氏名（和文表記とアルファベット表記）、所属機関名、職位を記した別紙2（A4判）1部

E-mail: cjle-kiyo@rikkyo.ac.jp

『日本語・日本語教育』執筆要領（和文論文）

1. 投稿原稿の構成

投稿原稿は、次の部分から構成されるものとします。この順序で書いてください。（著者名は除く。）

- (1) タイトル（和文・英文）副題は和文も英文も全角ダッシュ、中線（—）とする。
- (2) 要旨（日本語 400 字以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- (3) キーワード（原稿中の主要語句を日本語 5 語以内。）
- (4) 本文（図表を含む）
- (5) 注（必要に応じて）
- (6) 引用文献・参考資料一覧

2. 投稿論文のカテゴリー

(1) 研究論文：

日本語教育および関連領域について、十分に先行研究を把握した上で述べられているもの。

A：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている実践的論文。

B：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている調査論文。

C：先行研究を十分に把握した上で行っている日本語教育に関する提案、提言。

D：これまでに行われている研究、調査論文の総括および解説。

(2) 実践報告：

教育現場における実践の内容、効果等が具体的、かつ明示的に述べられているもの。

(3) 調査報告：

言語データ、史的資料、教育の現状分析や関連する意識調査の結果など、日本語教育にとって資料的価値が認められる報告が明確に記述され、結果の分析が行われているもの。

3. 投稿原稿の書式・分量

- 投稿原稿は「A4 判横書き、40 字× 35 行」で作成してください。原稿はワープロで作成し、図表を含め、できるだけ仕上げり紙面に近い形で原稿を作成してください。
- 分量
研究論文 20 枚以内
実践報告・調査報告 16 枚以内
- 本文（英数字含む）は明朝 10 ポイント、各章の見出しはゴシック 10 ポイント（太字にする必要はありません）とし、行間も統一してください。要旨、注、参考文献・資料で文字を小さく

したり、行間をつめたりしないでください。

- 句読点は「、」「。」で統一してください（表題も含みます）。
- 注は、脚注ではなく後注にし、注の番号は1)、2)、3) …としてください。片半角括弧をつける。
- 表番号と表題は表の上、図番号と図題は図の下に記載してください。
- 原稿は片面印刷にし、両面印刷にはしないでください。
- 数字の書き方 1桁も2桁以上も半角とする。

4. 資料・参考文献

• 資料

論文内に使用した他者の著作物（図版、写真等）は、投稿前に必要に応じて公開の許諾を得てください。

- 参考文献の書き方は、以下の基準に従うこと。

(1) 論文原稿の最後に、章番号をつけずに参考文献という見出しをつける。資料を載せる場合は、参考文献の後に、資料という見出しをつける。

(2) 参考文献は、日本語による文献（以下、日本語文献）と、外国語（英語、中国語など）による文献（以下、外国語文献）とを、それぞれまとめて、日本語文献、外国語文献、の順に記載する。

(3) 日本語文献は、第一著者の姓の五十音順に配列し、外国語文献は第一著者の姓のアルファベット順に配列する。

(4) 文中に引用する場合は以下の通りとする。

間接引用の場合（田中、2020）

直接引用の場合（田中、2020、56）（田中、2020、56-57）

- 各文献で記載すべき情報は、およそ次の通りです。

(1) 単行本<単著、共著>の場合：著者、発行年、書名、出版社名

(2) 単行本<分担執筆>の場合：分担執筆者、発行年、当該章の題名、編者、書名、章番号、出版社名、ページ

(3) 学術論文の場合：著者、発行年、題名、雑誌名、巻または号、ページ

(4) 学会発表予稿集（論文集）の場合：著者、発行年、題名、予稿集名（論文集名）、ページ

(5) 教科書の場合：著者、出版年、教科書名、出版社名

(6) インターネット情報の場合：著者（機関）、発行年、題名、URL、アクセス年月日

• 記載例

(1) 単行本<単著、共著>の場合 最後のピリオド「。」をつける。

横山紀子（2008）『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』
ひつじ書房。

Anderson, J. R. (1983). *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University

Press.

(2) 編著書中の論文の場合

松見法男 (2002) 「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子 (編) 『日本語教育のための心理学』第6章 新曜社 pp.97-110

MacWhinney, B. (1989) Competition and connectionism. In B. MacWhinney, & E. Bates (eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing* (pp.422-457). New York: Cambridge University Press.

(3) 学術論文の場合

宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち (2009) 「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響——文脈の中での意味推測を妨げる要因とは——」『日本語教育』140号、48-58.

小柳かおる (2002) 「Focus on Form と日本語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第5号、62-96.

Papagno, C., Valentine, T., & Baddeley, A. D. (1991) Phonological short-term memory and foreign-language vocabulary learning. *Journal of Memory and Language*, 30, 331-347.

(4) 学会発表予稿集 (論文集) の場合

迫田久美子・松見法男 (2005) 「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究 (2) ——音読練習との比較調査からわかること——」『2005年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、241-242.

(5) 教科書の場合

日本花子・東京次郎・大阪美子 (編) (2006) 『上級者のための日本語 (2) ——読解編——』日本語教育書房.

(6) インターネット情報の場合

日本語教育学会 (2020) 「『日本語教育』投稿要領」<http://www.nkg.or.jp/pdf/toukouyoryo.pdf> (2020年6月15日アクセス)